

令和 3 年 6 月 8 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K03044

研究課題名(和文) 人生100年時代のシニア留学：異文化接触がもたらす認知変容からの分析と提案

研究課題名(英文) Study-abroad for seniors in the era of 100-year life society

研究代表者

小柳 志津 (Koyanagi, Shizu)

東京都立大学・国際センター・准教授

研究者番号：20376990

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は「シニア期の留学での異文化接触における認知側面への影響やその要因を究明し、生涯教育としてのシニア留学を提案する」ことを目的に、マルタとイギリスで日本人シニア留学生20名の面接調査と英語学校や留学エージェント等関係者の聞き取り調査を実施した。現地英語学校が「居場所」としてのコミュニティとして機能し、「様々な国の人達と交流し日本とは異なる見方考え方に触れる」ことでシニア留学生は新たな人生観や生きがいを得ており、青年・成人期を越えたシニア期においても、異文化接触が認知変容をもたらすことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2017年に「人生100年時代構想会議」が開かれ、今後50代後半から70代が新たな活動期となることが予想される。一方で、定年後の課題はやることを見つけられず孤独なこと、とも言われている。これまで筆者は青年・成人期の海外留学の研究を通して、異文化接触がものの見方考え方に影響を及ぼす過程や要因について考えてきたが、本研究ではシニア期の留学において認知変容で新しい人生観や世界観へ視野が広がることを見出した。異文化コミュニケーションを目的としたシニア留学を促進し、シニア期の可能性を広げることができる。

研究成果の概要(英文)：This study examined the factors which affect the cognitive appraisal of senior citizens during intercultural contacts at study abroad. It also aimed to suggest study-abroad for seniors as lifelong learning. The research interviewed 20 Japanese senior students and spoke with the involved parties from English language schools and agents in Malta and UK. It revealed that English language school functions as a community giving belongingness to the students. By intercultural interactions with people from various countries, senior Japanese students discover new and different prospects from Japan and gain motivation or new visions of life. It can be said that intercultural contacts bring cognitive modification even at the stage of senior.

研究分野：文化心理学

キーワード：シニア留学 異文化接触 認知変容 異文化コミュニケーション 観光学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

学術的背景

人の感情や行動を決定する認知的評価(cognitive appraisal)の枠組は、生れ育った文化や社会で形成される(Lazarus, 1991)。海外滞在ではその文化・社会自体が変わるため心理や行動面に問題が起きるが、この点は異文化適応として認知側面の変容が論じられてきた(Ward 他, 2001)。

留学については、近年の交換留学や短期研修の急増を背景に成果の解明に力点が置かれ、異文化間能力の育成に大きな効果があること(Anderson 他, 2006)や主体性や柔軟性等の社会人基礎力が向上するとされる(野水ら, 2014)。しかし、これらは量的調査で変化を把握したが、留学中のどの要因がどんな成果をもたらすかは明らかでなく、対象も青年期の学生に限定されている。

一方、非日常圏での短期滞在を研究対象とする観光学でも、海外でのホストと旅行者の文化変容はテーマで(Berno と Ward, 2005)、観光による学習効果や、地元生活文化との接触について解明した研究(直井ら, 2014)もある。佐々木(2000)は旅行を通して新しい世界観が生まれる「創観」を示しており、これら知見は特に短期留学に対して有益な視点を提供すると考えられる。

筆者は、母国の文化規範に基づき行われていた認知的評価が、異文化接触により変化することで感情や行動が変わることを留学生の調査から示した(小柳, 2006)。また、1カ月の留学でも現地での豊富な異文化対人交流が人生観に影響することを明らかにした(Koyanagi, 2018)。しかし、シニア期の異文化接触による認知変容は解明されておらず、特に留学というコンテクストからの分析は無いのが現状である(小柳, 2012)。

本研究では「シニア期(50代後半～70代)の留学が、文化規範や人生観という認知的評価の枠組にどのような変容をもたらすのか? 生涯教育の場とするための必要要因は何か?」を学術的問いとし、質的分析により探究する。

社会的背景

2017年9月に「人生100年時代構想会議」が開かれ、何歳でも学び直せるリカレント教育や、人生を教育・就労・引退の3ステージからマルチステージ化することが提唱され、老後や余生ではない成人期と老年期を跨ぐ新たなステージの展開が期待されている。

本研究では、シニアを対象に留学の心理的影響を調査し、シニア期の異文化接触が持つ可能性に着目しシニア層の学びの機会として考える。現在、シニア留学は旅行会社が取扱っており学習得以外の要素が大きいことが予想されるため、留学を従来の心理学や教育学だけでなく観光学の視座も入れて分析する。加えて、留学を異文化適応や異文化間能力の習得からではなく、認知的評価の変容に焦点化し、環境と個人の相互作用を重視し全て質的調査で行う。

また、筆者は大学での派遣留学プログラムの経験も豊富であり、学術的理論のみならず実務的視点から生涯教育の機会としてのシニア留学を考える。

尚、シニア層の留学については、英語学校等で「50+ (フィフティ・プラス) 留学」という名称が使われており、「シニア」という語感がネガティブに響くこともあるため、本研究でも「50+ 留学」という表現も使用する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、シニア期の留学という異文化接触において、認知的評価枠組への影響やその要因を明らかにし、人生後半の人生観を創観する留学プログラムを提案することである。

具体的には以下の目的に沿って進める。

- ・留学したシニアの文化規範や人生観を明らかにし認知的評価への留学の影響を解明する。
- ・留学中の対人交流や生活の現状、宿舎や学校、プログラム内容を環境要因として抽出する。
- ・これらを統合して認知変容過程を分析し、創観をもたらすシニア期の留学機会を提案する。

3. 研究の方法

本研究は図1のように全体を大きく3つに分けて進めた。

・シニア留学の個人への影響

留学による認知的評価や価値観の変化の内容とその要因の関係性を明らかにする。

帰国後面接(国内)... 対象: 1ヵ月～1年程度のシニア留学帰国者。半構造化面接による質的分析(Grounded Theory Approach (GTA)、ケーススタディ等)。調査項目: 動機・語学力・現地对人交流・文化規範への態度・人生観等変化・満足/適応感・滞在先環境・帰国後の生活等。

留学中面接(海外)... 対象: 海外留学中のシニア(日本人+他国人含む)。半構造化面接。調査項目: 動機・語学力・対人交流・文化規範への態度・人生観・満足/適応感・滞在先環境等。

参与観察(海外)... 対象: の対象者。観察調査項目: 対人交流(同国人・他国人・ホスト)・宿泊先環境・日常生活・学内活動(授業・休み時間)・学外活動(放課後・休日)等。

・シニア留学の場

特にシニアが留学するにあたっての環境要因を抽出する。

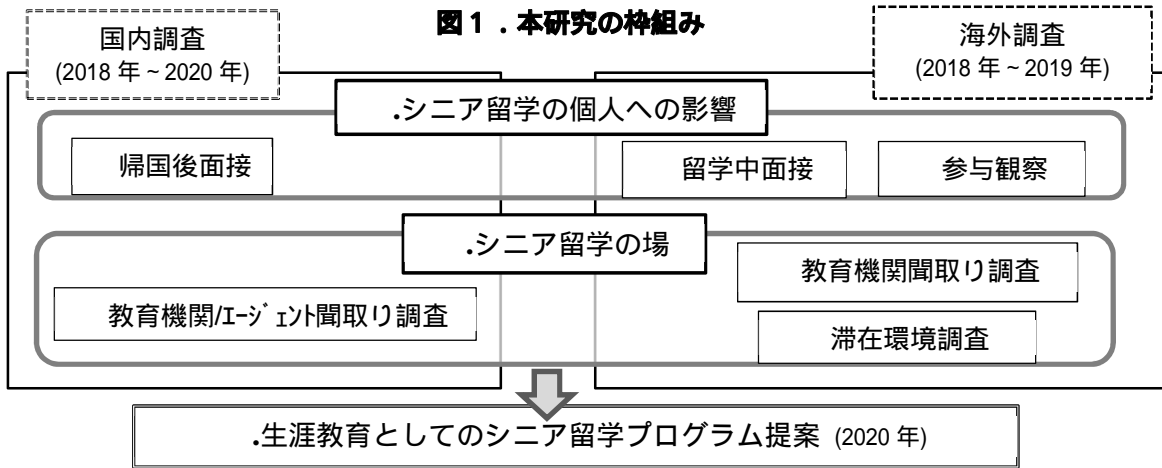
教育機関/留学エージェント聞き取り調査(国内)... 対象: 留学エージェントや教育機関。調査項目: シニア留学生全体像・派遣先選定方法・支援体制(学習/交流)・現地環境・危機管理等。

教育機関聞き取り調査(海外)... 対象: シニア留学受入の教育機関(語学学校等)。調査項目: 各国のシニア留学生の現状・プログラム内容(学習/交流)・学内外活動等。

滞在環境調査(海外)... 対象： の学校及びホストファミリー等宿泊先。調査項目：授業・学校設備・宿舍・学外活動の機会や内容・観光やショッピング含めた日常生活環境等。

・生涯学習としてのシニア留学のプログラム提案

上記の調査結果に基づき、マルチステージ化する人生でシニア留学が果たす役割を示し、プログラム内容や受入・送出の仕組みなどを留学エージェントや教育機関とも検討し、学会発表や教育/旅行機関への説明等により、生涯教育として有用となるシニア留学を提案する。



具体的には、2018年度前半は国内でシニア留学帰国者3名との面接、留学エージェント4社からの聞き取りを実施した。

2018年10月～2019年9月はマルタ大学観光文化研究所客員研究員として在籍し、シニア留学生受入れに積極的な英語学校が多いマルタ共和国と英国で海外調査を行った。マルタでは英語学校統括団体の FELTOM を通して調査協力を依頼し、日本人留学生の多い9校（マルタ7校、イギリス2校）の英語学校校長やプログラム担当者、英語教師から聞き取り調査を実施した。特に日本人留学生を担当する現地日本人スタッフとフォーマル、インフォーマルに会って多角的で有意義なフィールド調査が実施できた。

留学中の調査参加者は合計20名（内女性14名：男性6名、マルタ17名：イギリス3名）で、年齢は50代前半から70代後半、留学期間は1週間から3ヶ月で、50+向けプログラム参加者は3名、他は通年行われる一般英語の参加者である。面接は学校のラウンジや近くのカフェで行い、個人情報保護等の調査倫理を説明して参加の同意を得、可能な場合は録音をした（12名）。録音できない場合はメモを取り面接後にまとめた。メール等の内容も質的データとする。これらは文字起こしをしてテキスト化し、修正版 Grounded Theory Approach の手法を採用して分析した。

4 . 研究成果

・シニア留学の個人への影響

国内での帰国者面接で把握した要因や背景を参考に海外調査を実施した。ここでは特にマルタとイギリスにおけるシニア留学の個人への影響について述べる。

留学先としてのマルタ

50+ 留学の市場を日本ではあまり馴染みのないマルタの現状から解説する。マルタ共和国はEU加盟国の中でも最小の国であるが、1964年までの約160年間にわたりイギリスが統治していたためマルタ語と英語が公用語となっており、その強みを生かして外国人向けの英語学校が40校以上も存在する。2018年には年間合計87,112人がマルタの英語学校に在籍した¹⁾。

その数はマルタへの年間訪問者数2,598,690人に対して3.4%だが、滞在期間が平均2.5週間と長めであることを考慮すると、マルタのGDPの約27%を占める観光業での位置付けは大きい。マルタの英語学校は自らを教育産業と観光産業の両者に位置付けており、特定のニーズに対応する「niche tourism」として確固たる地位を築いている。イギリスに比べ学費も生活費も割安で、欧州各地からアクセスが容易なため、欧州諸国からの留学生が多いことが特徴である。

マルタの英語学校在籍者のデータから、50+ 留学の動向を見てみよう。1996年は31才以上がカテゴリーとして一括りにされ、全在籍者29,007人に対して1,311人と4.5%である。その多くは30代でシニア層は非常に少ないと思われる。一方、2018年は50才以上が6,159人で全体の7.1%となっており、50+ 留学が大きく増えていることがわかる。

その背景に、マルタの英語学校数校が50才以上を対象とした2週間程度のプログラムを実施していることがあげられる。そこでは午前3時間程度の英語授業、午後や週末はマルタの観光名所を回る「アクティビティ」がパッケージ、もしくはオプションとして用意されている。

日本人留学生の動向を見てみると、1996年は日本人在籍者121人の内、31才以上のカテゴリーは0人であった。2012年は計884人の内50+は58人、2018年は計3,508人のうち50+が112人となっており、50+ 留学者数はこの6年で倍増している。

20名とのインタビューから明らかとなった50+留学の意義は、「いろいろな国の人々と交流ができること」に集約できる。ここでは「各国からの留学生との交流」と「現地人との交流」に分け、具体的な発言やケースにより説明しよう。

(1)各国からの留学生との交流

学校では各自の英語力に応じたクラスに入るが、他の留学生との交流は「授業中」と「授業時間外」、「学校が主催するアクティビティ」に行われる。

1)授業中

英語学校の授業は教師の一方的講義ではなく生徒との双方向のやり取りが多い。ディスカッションする、各国の状況を教師が質問するということが頻繁にあるが、その中で各国の事情やクラスメイトの状況などを聞き、「日本とは異なる見方考え方」を知ることになる。

Aさんは留学で良かったことを以下に話した。

トルコの男性が何気なく見せてくれた写真、「ポートピーブルの小さなテントが私の街にはいっぱい立ってて」って。帰ったらみんなに見せてあげたい。やっぱり日本の治安が良いとか、お友達を介してそういうの感じられる。孫に見せたい。…車に乗ってセルフォンを使うのはリーガル？イリーガル？なんて話になった時に各国違うんですね。具体的にどう違うかは忘れまじけれど、ああ、国柄で違うんだあって。みんなの国では？って話題になったときに、各国の皆さんが言うじゃないですか、片言の英語で。私も片言の英語で言うんですけど。なんかそういうのがすごく面白いですね。

Aさんのクラスは elementary で英語レベルとしては下の方だが、教師が生徒の発言の手助けをするので、理解ができるし説明もできるということだ。

2)休み時間や放課後、休日等の授業時間外

授業以外でも学校でできた友人と一緒にランチや夕飯に行く、放課後お茶する、ということも日常的である。また、半日の授業後や休日に観光に行くことも多い。

海外旅行が大好きというBさんは；

火曜日はクラスメイトのスペイン人女性2人と歩いてスリマの方に行ってきた。水曜日はクラスの男性が車持ってるのでクラスメイト5人ぐらいで出かけた。昨日は寮の同室の64歳の女性と一緒にバレッタまで行って観光して。

と、1週間の滞在で午前の授業と午後の観光・交流を満喫しているが、そもそも英語学校留学の理由を以下のように語っている。

一人旅ってすごく努力しないと誰かと話す機会って少ないじゃないですか。だからいつも現地のツアーに参加するんですよ、英語のツアーとか。そこで友達になって話す。英語学校に来れば同じ目的の人もいっぱいいるし、英語ができなくてもみんなできないから来てるんだし、気後れもしないかなっていうのがあって。英語の勉強もしたいし観光もしたい。

海外一人旅だと接する人が宿泊先やお店の人などに限られてしまい、黙々と「観る」ことで終わってしまいがちだが、英語学校で友人を作り一緒に観光することで楽しみが倍増する。そうしたことができるのも留学のメリットである。

3)学校主催のアクティビティ

学校は週に何回かパーティや観光などのアクティビティを実施するが、これはレジャーのためだけではない。生徒の英語力、特にスピーキング力を上げるには生徒同士でどんどん話すことが最適である。そのためにも学校では様々なアクティビティを用意し、生徒同士の交流に力を入れている。Cさんは、学校のアクティビティは交流促進のシステムが素晴らしいと、以下のように述べた。

パーティではしゃべる奴が大体いるから、話聞いているだけでも耳が慣れてくる。一回でも一緒に席に着いたりご飯食べたたり、ご縁ができると、次の日にはもう「ハーイ」って。「ハーイ」って言うだけでも、人間それだけでも幸せになれるですね。…ほんとに目を奪われるくらいの可愛い子とかいるじゃないですか。クラスメイトじゃなくても学校のツアーと一緒に行ってワインとか一緒に飲んだりして。大変ですよ、ほんとに。1人の旅行じゃ考えられないですよ。そういう人達と一緒に席に着くってことも普通ないじゃないですか。お互いに英語勉強しにきてるから英語で話したいわけですよ。だからこんなにお膳立てができてるようなプログラムないです。

(2)現地人との交流

ホームステイでは現地の人達の生活を知り交流の機会が生まれる絶好の場である。60代のDさんは、70代のホストマザーが親子のように面倒を見てくれるそうで、彼女の元英語教師の友人がスパルタで英語を教えてくれることや、一緒にバザーに行くことなどを述べた。Aさんはホームステイ先の家族ディナーに参加したり、ホストマザーの家族を思う気持ちに触れて、「世界どこでも同じなんだなあ」と実感したそうだ。Eさんもホストファミリーの孫との写真を見せてくれ、「こういう場に参加できることはとても嬉しい」と話した。

イギリスの郊外で学ぶFさんは、毎年同じ学校、同じホストファミリーに来ており、既に9回目の留学だそうである。ホストファミリーとは日本からもメールで連絡を取り、第二の家族のようだと話す。Fさんにとって、毎年イギリスに留学することが人生の励みとなり、日本でもそれに向けて英語の勉強をして生活にハリがあると語った。

キャリアや学業のための英語習得が目的ではないシニア世代にとって、異文化コミュニケーションが英語学習以上に大きな魅力となることがわかった。次に、その異文化コミュニケーションを活性化するための環境要因を分析しよう。

学校の聞き取り調査や参与観察により、「コミュニティとしての英語学校」という機能が重要なことが明らかとなった。英語学校Zの担当者は「学校、クラスに毎日通うことでbelongingness（所属意識）が生まれる」と話し、居場所としての学校の役割を重視していることを話した。数週間通う学校が留学生の心地よい「居場所」となり、「仲間と同じ目的を持って」毎日「暮らす」ことができる、という点は、一般的な観光旅行とは全く違った醍醐味となる。

もちろん“留学”であるので、学習の環境として適切な教員や教室、滞在先の確保、カフェテリアや自習室の整備などの要素があるが、それらに加えて50+留学には、自国から離れて様々な国の人々と異文化コミュニケーションを楽しみ、新しい見方考え方を知るための環境が重要となる。そのためにはコミュニケーション促進を重視した授業やアクティビティとともに、所属意識を感じられる居場所、というのが望まれるのだ。

・生涯学習としてのシニア留学のプログラム提案

本研究では、シニア世代の海外英語留学の意義について「様々な国の人たちと活発に交流し、日本とは異なる見方考え方に触れる」という点が大きいことがわかった。留学というと学問習得を目指す若者向けという意識が強いが、今回の結果から異文化コミュニケーションを主軸とした50+留学の促進を提案したい。一方で、英語を使うことに臆病になりコミュニケーションを楽しめない、ホストファミリーと上手くいかない、というケースもあるため、事前の研修等によりそれら阻害要因に対応することも必要である。留学は「教育」面からの分析が多いが、50+留学は青年期のものとは目的や意味が異なるため、観光側面からの分析が必要である。

今回の調査から、日常圏を離れて異文化コミュニケーションをすること自体が留学の目的となりえることがわかった。しかし非常に残念なことに、2020年初頭からの世界的な新型コロナウイルスの流行により海外渡航が非常に困難な状況となっている。留学エージェントや英語学校のスタッフにフォローアップ調査を行ったが、この状況下で既に解雇されたり転職をしたりという方も多く、今後の50+留学の状況が心配される。

一方、コロナ禍をきっかけに大きく広がったオンラインによる語学学校への参加は、日本に居ながらにして現地教師の指導や世界各国の生徒との交流を可能にし、異文化コミュニケーションと語学学習が自宅でできるようになった。移動や費用の負担が大幅に減ったことで参加者のすそ野が広がる。但し、実際に海外に滞在して留学を経験するのとオンライン参加では、心理側面への影響は大きく異なることが予想されるが、それについては今後の調査が待たれる。

また、この新型コロナウイルス流行による自粛生活が、シニア層の人々の海外渡航や海外留学に対して意識の変化をもたらしている可能性がある。コロナ禍が収まれば海外留学は可能となるが、異文化交流を渴望する状況となるのか、海外渡航への不安が増加するのか、もしくはオンラインで十分となるのか、今後の50+留学の方向性を判断するために調査する必要がある。しかしながら、この状況下で2020年度予定の面接や調査の場を得るのが困難となり、シニア留学プログラムの提案は保留状態である。

一方で、今までの調査や研究知見に基づき、インターネット上にシニア向けの海外留学や海外滞在についてのサイトを立ち上げるべく、現在準備中である。

【参考文献】

- Anderson, P. 他(2006). Short-term study abroad and intercultural sensitivity: A pilot study. *International Journal of Intercultural Relations*, 30(4), 457-469.
- Berno, T., Ward, C. (2005): Innocence abroad: a pocket guide to psychological research on tourism. *American Psychologist*, 60(6):593-600.
- 小柳志津 (2006). 感情心理学からの文化接触研究: 在豪日本人留学生と在日アジア系留学生との面接から 風間書房.
- 小柳志津(2012). 日本人引退在外シニアの対人交流: ホストとの対人交流促進・阻害要因の再考 異文化コミュニケーション, 15, 33-49.
- Koyanagi, S. (2018): Impact of Intercultural Communication during short-term study-abroad of Japanese students: Analysis from a perspective of cognitive modification. *Journal of Intercultural Communication Research*, 47(2), 105-120.
- 直井岳人・十代田朗・飯島祥二(2014). 歴史的町並みにおける訪問客のまなざしの差異と町並みの印象との関係: 岐阜県高山市の歴史的町並みをケースとして 観光研究, 26(1), 47-60.
- 野水勉, 新田功(2014): 海外留学することの意義, 留学交流, 2014年7月号, 20-39.
- 佐々木土師二(2000). 旅行者行動の心理学 関西大学出版部.
- Ward, C., Bochner, S. & Furnham, A. (2001). *The Psychology of Culture Shock*. London: Routledge.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 小柳志津
2. 発表標題 “ Understanding Intercultural Communication: Theoretical Insights from Cognitive Behavioural Therapy (CBT) ”
3. 学会等名 SIETAR Europa Congress 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小柳志津
2. 発表標題 「異文化コミュニケーションの場としての50+（シニア）留学」
3. 学会等名 第34回異文化コミュニケーション学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小柳志津
2. 発表標題 「マルタとイギリスの事例からみる50+留学の魅力 - 観光資源としての異文化コミュニケーション - 」
3. 学会等名 第34回日本観光研究学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小柳志津
2. 発表標題 Examining factors promoting cognitive modification by intercultural communication
3. 学会等名 2018 SIETAR JAPAN World Congress (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小柳志津
2. 発表標題 Understanding Intercultural Communication: Theoretical Insights from Cognitive Behavioural Therapy (CBT)
3. 学会等名 SIETAR Europa Congress 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小柳志津
2. 発表標題 50+ (シニア)留学による異文化接触がもたらす心理面への影響
3. 学会等名 第41回異文化間教育学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	直井 岳人 (Naoi Taketo) (10341075)	東京都立大学・都市環境科学研究科・准教授 (22604)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------